巻頭言
Foreword

安全の要諦と感じていること リスクベース、実効性の継続的改善、当事者意識

安全工学会 会長　鹿島石油株式会社 代表取締役社長　**武藤　潤**
Jun Mutoh

新型コロナウイルス感染症は、2020年以来、収束したと言える状況ではありませんが、感染や治療に関する疫学的・医学的な知見や経験が蓄積され、また、ワクチンの接種もすすみ、私たちは日常生活を取り戻しつつあります。5月には、感染症法上の分類も現在の2類から5類への変更の方針が示されました。科学的根拠に基づいて、リスクベースで、混乱なく合理的に移行できれば良いと思っています。

社会は感染症に限らずリスクに満ち溢れています。リスクゼロという社会や生活はありえませんし、リスクをゼロとみなした瞬間、安全を追求する思考は停止します。大切なことは、リスクを避けるのではなく、積極的に見いだして、リスク事象の発生頻度と影響度を許容できるか否か評価し、許容できない場合は、効果的な対策を講じるということです。

さて、労働安全、交通安全、各種産業の安全など、安全には様々な分類がありますが、事故統計を俯瞰すると、例えば過去50年で、事故の件数は明らかに減少しています。これまでの安全の取り組みによって、社会全体の安全の水準は着実に改善しています。一方、再発防止と未然防止の取り組みが十分かと問われると、事故は減少傾向にあるとはいえ、繰り返し類似の事故が絶えないこと、また、不十分なリスク想定やリスク事象の発生頻度・影響度の過小評価で事故も発生しており、再発防止・未然防止ともに改善の余地はあります。

処方箋として、なにか特効薬があるわけではありません。安全活動の「実効性」を継続的に改善することです。実効性は形骸化し経年劣化します。手段が目的化し、「実効」ではなく「実行」に置き換わったりします。訓練のための訓練とか、形骸化したアセスメントでは意味がありません。目的に立ち返り、PDCAを活用して、実効性の継続的改善を意識した取り組みこそが必要です。その際、当事者意識を強く持つことは実効性の継続的改善に不可欠で、安全活動の質に影響をあたえます。

私は、最近、雪山に登るようになりました。転倒や滑落は、事故・遭難に直結しますので、次の一歩、次の行動に潜む危険は無いのか、危険予知や指差呼称は、真剣そのものです。リスクアセスメントにも余念がありません。計画時、山の選択において、自身の体力やスキルで無理はないか、携帯する装備に不足はないか、もしもの時のコンティンジェンシープランは機能するか、最近の遭難事例の教訓は活かされているか、正常性バイアスの罠に陥ってないか、他人事ではないのです。究極の当事者意識で自問自答と熟慮が尽きません。想定外は即、事故・遭難につながるからです。当事者意識が安全活動の質に影響していると痛感しています。

以上、安全の要として大切と思っていること　①リスクベース、②実効性の継続的改善、③当事者意識について、巻頭言に述べさせていただきました。

公益財団法人総合安全工学研究所 理事・監事

理事長（代表理事）	田村昌三	東京大学名誉教授
専務理事（執行理事）	小川輝繁	横浜国立大学名誉教授
常務理事	福富洋志	横浜国立大学名誉教授 新構造材料技術研究組合
常務理事	若倉正英	(国研)産業技術総合研究所客員研究員 (特非)保安力向上センター センター長
理事	新井　充	東京大学名誉教授
理事	高木伸夫	システム安全研究所
理事	谷　質生	日油技研工業(株)川越工場長
理事	三宅淳巳	横浜国立大学理事・副学長
理事	安原　洋	東京逓信病院病院長
監事	河野晴行	(公社)日本煙火協会専務理事
監事	田中保正	元(一社)日本芳香族工業会専務理事